

蓮如と民俗信仰

——物忌意識を中心に——

朝 倉 昌 紀

はじめに

真宗における民俗の問題は、現代における我々の生活の場においても信仰の本質に関わる重要な課題の一つであると思われる。真宗と民俗の問題について考察することは、真宗が日本人の精神生活に如何なる影響を与えたかを知る上でも重要なことであろう。

鎌倉時代における民俗宗教の実態としては、了恵が編集した『和語燈録』の「一百四十五箇条問答」において、民俗信仰と念仏生活との関わりについて問答がなされている。それには、死穢・産穢・血穢の三不浄を忌むことや、神社仏閣への物詣でにまつわる物忌などの禁忌についても取り上げられており、当時の貴族たちやそこに仕えるものたちが、民俗信仰に対して宗教的な畏怖の念を抱いていたことが窺えるのである。

そのような中で、親鸞は本願念仏とは如何なるものにも障碍されることのない無碍の一道であると捉え、本願念仏の信仰体系をもって民俗信仰を超越していこうとしたのである。

このような親鸞の姿勢は、民俗信仰に対して新しい形態を作ったと言えよう。『正像末和讃』に

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあげめつつ

卜占祭祀つとめとす（真宗聖教全書一・五二八頁）

と述べられる如き中世社会の現状の中で、本願念仏によって禁忌による拘束から解放しようとしたのである。

しかし、このような親鸞の民俗信仰を超越する論理が、民衆の中にすぐに浸透していったとは考えられない。真宗の伝統とされる民俗的信仰否定の姿勢が、民衆の中に如何に展開されていったかについて考えてみる必要があると思う。そこ

で今回は、民俗の変動期とされる十五世紀に生きた蓮如について考察していききたい。民俗宗教とは、祖先供養・現世祈願・物忌という三つの要素によって成立しているのとみることができ、その中で今回は特に物忌(禁忌)意識について焦点をあてて考察していききたい。

一 真宗における民俗信仰否定の伝統

仏教とは本来忌みを語らない宗教であるが、民衆の信仰意識の中には死を穢として忌み嫌う不浄という考え方があった。その観念は、陰陽道が母体となる思想であるが、日本における陰陽道は神秘性を濃くして、旧来の信仰や習俗と融合して新たな禁忌・物忌を創出して中世へと流れてきたわけである。このような中世民衆の信仰意識の中で、親鸞以後真宗においては禁忌を否定する見方が伝統となつていたのであり、それに伴つて民衆の禁忌意識についても、幾らかの変化がみられるのである。

そこでまず初めに、蓮如に至るまでの真宗における民俗信仰(物忌)否定の見方について窺いたい。まず覚如は『御伝鈔』において門弟平太郎が熊野権現に参詣するときの話として

道の作法とりわき整る儀なし。ただ常没の凡情にしたがひて、さらに不浄をも刷ことなし。行住坐臥に本願をあふぎ、造次顛沛に

蓮如と民俗信仰(朝倉)

師教をまもるに、はたして無為に参著の夜、件の男夢に告云、証誠殿の扉を排て、衣冠ただしき俗人仰られて云、汝何ぞわれを忽略して汚穢不浄にして参詣するやと。その時かの俗人対座して聖人忽爾としてまみえたまふ。その詞にのたまはく、かれは善信が訓により念仏するものなりと云云。(真宗聖教全書三・六五二頁)

と記され、汚穢不浄のままに熊野に参詣することが認められ、念仏者は不浄禁忌を問わない姿勢がみられるのである。また、存覚は『破邪顕正抄』において、真宗門徒に対する教団外からの非難として何か条かを挙げる中で「触穢をはばからず日の吉凶をえらばざる条、不法の至極たるよしの事」という条に

仏法のなかには生死煩惱をもて穢とし、功德善根をもて浄とす。これすなはち仏陀の教をたるおもむき、菩薩の生を利するみちなり。世間の儀には死生等の禁忌をもて穢とし、これをさるをもて浄とす。これすなはち神明のひとをいましむる法、王法の制をさだむる式なり。(真宗聖教全書三・一七一頁)

とあり、仏法では世間でいうような意味の穢れはないことが明かされている。また『諸神本懐集』には

ふかく生死のけがれをいむは、生死の輪廻をいとふいましめなり。つねにあゆみをはこぼしむるは、勤行精進をすすむるころなり。しかればほかには生死をいむをもてその儀とすれども、うちには生死をいとふをもて、本懐とす、うへには潔済を精進とす

れども、したには仏法を行するをもて精進とす。（真宗史料集成 一・七〇三頁）

とあり、生死の穢れを忌むということが、生死を厭うことであると言き示すのである。同様に、談義本である『熊野教化集』にも

一向専修のひとは、いとものいまぬとうけたまはりさふらふが、いかなることにてそふらふやらん。（略）仏神のいみといふは、生死をいとひ後世をねがふをこそ、まことのいみとはまふしさふらへ。生ずることもなく、死することもなき浄土にまひるこそ、生死をいみいとふひとにてはさふらへ。（真宗史料集成五・一〇九頁）

と記されており、生死の穢れを忌むという意識から生死、穢土を厭うという見方に展開していったことが窺えるのである。

故に、これらの文から考えれば、民衆のあいだには従来の不浄禁忌というものが、輪廻観や厭穢観更には無常観という方向へ転換され広まっていたと考えることができるであろう。

二 蓮如における民俗信仰への対応

前章で述べた伝統の中で、蓮如へと展開していくのであるが、まず蓮如が民俗信仰について言及している文を窺えば、

『空善聞書』において

十六日は炎魔王の縁日なれば、その日善をなして、炎魔王にまいらせて、もしかへものにくるしみの宥免すこしもあらんずるようにみなおもへり。世界の人の心、このころなり。あさましきこと也。（真宗史料集成二・四二〇頁）

と記されている。これは炎魔王の縁日に善いことをすれば死後の苦しみも許されると多くの人が信じていることはあさましいことであると蓮如が述べるものであり、現世祈願を否定するものと考えられる。また『空善聞書』には

法然聖人の仰に、わが菩提所をつくるまじき、わがあととは称名ある処すなはちわがあととなり、と仰ありけり。またあとをとふら（ふ）といひて、いはいそとばをたつるは、輪廻するものすること也と。（真宗史料集成二・四二六頁）

と記され、位牌や墓を立てるのは輪廻するものすることであると蓮如が成めていることが窺える。これらの文より、蓮如は現世祈願や祖先供養を厳しく批判していることがわかる。

そこで、民俗宗教のもう一つの要素である物忌、禁忌について窺いたい。その背景となる歴史的事情としては、応永三十二年から応仁二年の間に、「新羅社服忌令」「伊勢大神宮参詣精神条々」「日光山物忌令」「太神宮ぶつきりやう」などの物忌についての法令が制定され、これらによって民衆は拘束

されていたのであり、死というものが権力によって管理されていたとみることができ⁽²⁾る。このような背景を踏まえて、蓮如が物忌について言及しているところを窺えば、『御文章』一帖目九通に

物忌といふことは、わが流には仏法についてもいまはぬといへることなり。他宗にも公方にも対しては、などか物をいまだらんや。他宗・他門にむかひてはもとよりいむべきこと勿論なり。またよその人の物いむといひてそしるることあるべからず。しかりといへども、仏法を修行せんひとは、念仏者にかざらず、物さのみいむべからずと、あきらかに諸経の文にもあまたみえたり。(真宗聖教全書三・四二四頁)

と記されている。またその二ヵ月後の『御文章』帖外二一条には掟の一つとして

物忌事就^レ仏法之方^ニ雖^レ无^レ之、他宗並対^ニ公方^ニ堅可^レ忌事。(真宗聖教全書五・三二四頁)

と記されており、念仏者が物忌をすることは厳しく否定するが、他宗のものが物忌するのを批判すべきではないと述べている。

そこで、この蓮如の物忌に対する姿勢について注目したのであるが、蓮如にとって民俗の問題は死ということが深く関わってくるのではないかと思う。蓮如と民衆を結び付けたものは死の問題であったのではなからうか。なぜなら、死と

いうことに直接関わってくるのが物忌意識であるからである。そこで、蓮如において死が如何に捉えられていたかと言えば、死とは克服することのできない二つの様相を表すものであった。まず蓮如は後生と現世を明確にすることによって、死を生から明確に分けるものとして捉えているのである。例えば『御文章』帖外四八通に

今生・後生とは申せども、後生こそなを大事にこそ候え。今生はいかように候とも、後生に極楽にまひり仏になり候はんこそ、目出事にては候はんずれ。(真宗聖教全書五・三四三頁)

と記されており、後生と現世を明確に区別するものと考えられる表現がみられる。蓮如はこのような表現によって、死を強調したと考えることができるのである。しかし、また一方で蓮如の説示から、死とは生と明確に分けられるものではないという見方もできる。例えば『御文章』一帖目十一通、帖外二四通にはそれぞれ

無常のかげきたりてさそひなば、いかなる病苦にあひてかむなしくなりなんや。(略)ただふかくねがふべきは後生なり、またたのむべきは弥陀如来なり、信心決定してまいるべきは安養の浄土なりとおもふべきなり。(真宗聖教全書三・四一七～四一八頁)

ただいまも無常の風にあひなば、すなはちやぶれなんことは誰の人かのがるべきただふかくいふべきは娑婆世界なり、またねがふべきは安養世界なり。(真宗聖教全書五・三二九頁)

と述べられているが、この中で「ねがふべきは後生なり」「ねがふべきは安養世界なり」という表現がみられる。この蓮如の現世において浄土をねがうべきであるという説示は、結局は信心を勧めることに他ならないのである。それは、例えば『御文章』二帖目三通に

しかば祖師聖人御相伝一流の肝要は、ただこの信心ひとつに過ぎれり。これをしらざるをもつて他門とし、これをしれるをもつて真宗のしるしとす。（真宗聖教全書三・四三二頁）

とあるに代表される如く、信心が肝要であることを強調することからも窺えるのではなからうか。浄土をねがうべきであるという説示は、後生と現生を区別するものではない。故に、蓮如における死の捉え方というものは、二面性をもっていたと言えよう。即ち、一面では死を通して体制擁護的側面がみられ、また一方では体制否定的な姿勢が窺えるのである³⁾。

以上のことから考えれば、蓮如にとって民俗の問題の一つである物忌意識に対する対応が、当時の社会事情や権力の問題と深く関わりをもっていたと言えるのである。特に、死というものがポイントになるのではなからうか。即ち、まとめれば、蓮如はその当時の社会の状況の中で、民俗宗教に対して単に妥協するのではなく二面性を持ち備えながらうまく民俗の問題を包摂し、そしてそれを超克していこうとしたと

捉えることができるのではなからうか。

むすびにかえて

以上、蓮如と民俗信仰について物忌意識を中心に考察してみたのであるが、蓮如にとって民衆を教化していく上で民俗の問題は大きな課題であったのであり、蓮如の苦心が窺えるのである。

真宗と民俗の問題は、従来あまり問題にされず避けられていたように思える。しかし、民俗信仰が日本人の無意識に至る深層に深く関わる問題であると考えれば、真宗の教義を解明する上でも、民俗信仰と関わりのある庶民の信仰意識について究明する必要があると思われるのである。今後の研究課題としていきたい。

1 横井清著『中世民衆の生活文化』二六八頁参照。

2 星野元貞著「中世後期の真宗と呪術」(『仏教史学論集』所収)三六六頁参照。

3 和田俊昭著「蓮如と死の民俗学」(龍谷教学21号所収)三八頁参照。

〈キーワード〉 蓮如、民俗宗教、物忌

(龍谷大学講師)